

はじめに

学校が抱えている様々な問題のうち、学力の問題はやはり最大関心事の一つといえるでしょう。学校内での子ども同士の評価や社会からの学校評価は、いろいろと言われながらも、本音のところ、学力が主要な評価基準になっているように思います。学力問題が本当の意味で解決されるならば、その他の教育問題についても、それに連動して解消されるものが少なからずあるのではないのでしょうか。

学力は、その明確な定義は難しいようですが、少なくとも、学習によって習得される技能を含む知識と、学習時に発揮される思考力、理解力、観察力等の能力から成り立っているといえます。前者は主として習得型の教育・学習によって豊かになり、後者は探究型の教育・学習によって育成されますが、もちろん、両者は二者分立的な立場にあるのではなく、習得された知識を土壌として思考力や理解力等の能力が培われる一方で、そのような能力が新たな知識の獲得や、より高度な知識への転化に寄与するという、少なくとも互いに発展させ合う相互関係にあるといえます。

しかしながら、実際の授業においては、自分で考え判断しようとする気持ちが弱い子どもや、意見を述べ合いながら学びを深めていく姿勢が弱い子どもが少なくなく、そのような実態を見ると、およそ子供は学習内容をそのまま記憶することのみに心がけて、知識を習得して満足しているというのが実情のように思えます。

本校は今年度から、「知識創造の力を育む授業」という主題で、教育実践研究を行うことになりました。この知識創造は、単なる習得型の教育・学習による知識の創造だけでなく、上述の相互関係による知識の創造も意味しています。児童が上の学年に進むにつれて、学習内容のレベルが上がり、習得すべき知識は一般化し、抽象化していきますが、この知識創造は、その一般化や抽象化を包含するものであり、そういう点からも、知識創造の力を育む授業についての実践研究は大いに意義のあるものと思っております。

本研究では、子どもが主体的に、そして協同的に学習に取り組んで、習得した知識をさらに生かしていく力を発揮できる、そのような子どもを育成するにはどうすればよいか、そして、そのような子ども像に迫るための授業をいかにしてデザインすればよいかを追究していきますが、今年度はさらにそのテーマを絞り込み、「かかわりの場をデザインする」という副題で、子供たちが互いに働きあって自分たちの意識を学習課題に向けるような活動を行い、その活動を主たる手だてとして、知識創造の力が育まれていく授業づくりを主眼としております。

本研究紀要はその実践研究の報告書です。高覧いただき、忌憚のないご意見とご指導を賜れば幸いです。

平成18年11月9日

金沢大学教育学部附属小学校
校長 島中 洋志